

第 94 回 歴史リレー講座「聖林寺十一面観音の来歴」 倉本 明佳氏 (R4.7.17)

私が住職を務める聖林寺（桜井市）は和銅 5 年（712 年）に多武峰妙楽寺（現在の談山神社）の別院として藤原鎌足の長男じょうえ定慧によって創建されました。平安時代に興福寺による焼き討ちに遭ったため、現在の本尊と本堂は江戸中期のものです。本尊である子安延命地蔵菩薩は堂内安置の石仏としては国内最大級を誇ります。蓮座を含め一つの御影石で造られており、左右に掌善童子と掌悪童子を従えています。数年前にはこの石仏にまつわる民話を元にした絵本『大きな石のお地蔵さま』が出版されました。

聖林寺といえば後でご説明する国宝十一面観音立像（奈良時代）ですが、室町や鎌倉時代の仏様ももちろん残っています。なかでも、如来荒神は大日如来と荒神（竈の神様）が神仏習合したお姿。端正なお顔立ちの阿弥陀三尊は藤原時代後期のものです。聖林寺では毎年 11 月に本堂横の書院で曼荼羅を公開しています。もともとは密教に関する悟りの境地を描いた曼荼羅ですが、現代では大乘仏教や神仏のほんじすいじやく本地垂迹思想（神道の神は、民衆を救うために仏が姿を変えて現れたという説）に関するものも含まれます。

聖林寺の當麻曼荼羅には観無量寿経極楽浄土が描かれています。中央に阿弥陀如来が位置し、両端にいらっしやるのが観音菩薩と勢至菩薩。ところで、「音を観る菩薩」とは少し不可解です。「観音」は梵語で「avalokita 観察された」「śvara 音・声」という言葉から来たもので、音すら目に見えるほどの超人的な力を表します。ですから、多くの菩薩の中で観音菩薩が最初に私たちのところへ救いに来られたのです。特に十一面観音菩薩は後ろにも顔があるので私たち人間はさらに安心できるというわけです。

それぞれのお顔には様々な表情（菩薩面、憤怒面、牙上出面、大笑面、頂上仏面）が浮かんでおり、頂上仏面をぐるりと菩薩が取り囲んでいます。頂上仏面だけは如来で、頭部が盛り上がっています。これは苦悩の末に出家した釈迦が 35 歳で真理に目覚めたとき、体毛が右巻きに変化して螺髪となったことに由来します。すなわち螺髪のある仏が如来です。如来は真理に目覚めた仏様のことで浄土を離れることはありません。一方、菩薩は私たちの助けの声を聞けばすぐに駆け付けて来て下さる仏様（豪華なアクセサリーを身に纏っている）で、王子時代の釈迦がモチーフだといわれます。残念ながら聖林寺の十一面観音菩薩は三つの面（菩薩面、牙上出面、大笑面）を亡失しています。

十一面観音菩薩のありがたみは、何ととっても「現世利益」でしょう。十もある御利益の第一に挙げられるのが「りしよえきびょう離諸疫病」（病気に罹らない）。聖林寺の十一面観音菩薩は、もとは三輪山の大御輪寺（大神神社の神宮寺）にありました。『古事記』や『日本書紀』には、崇神天皇の時代に大流行した疫病を鎮めるために大田田根子を神主に据えたとあります。明治時代になると、廃仏毀釈の難から逃れるため聖林寺まで大八車で移送。そのお姿は高さ 2m あまり、木心乾漆という技法で造られています。これは木彫りの像の表面を木屎漆こくそうるし（漆に木の粉などを混ぜたもの）で盛り上げて成形したのちに金箔を施すというもの。

『古寺巡礼』（1919 年）の著者、和辻哲郎さんがこの像を「神々しい威厳と人間のものならぬ美しさ」と絶賛したことは有名です。この書がきっかけで聖林寺を訪ねた随筆家の白洲正子さんも著書『十一面観音巡礼』（1975 年）の中で「世の中にこんな美しいものがあるのかと、私はただ茫然とみとれていた」と述べています。また、明治 20 年に岡倉天心らと調査で聖林寺を訪れたアメリカの美術史家フェノロサは、十一面観音菩薩をギリシャ彫刻に匹敵する存在だと驚嘆したあまり、可動式の厨子を寄進したほどです。

令和 2 年には観音堂の大掛かりな耐震改修工事が始まり、昨年竣工しました。そして同 6 月には東京国立博物館で特別展を開催することができました。この 6 月にはガラスケースの「厨子」を搬入、あとは観音様のお帰りを待つばかりです。これもクラウドファンディングなどで大勢の方からご寄進を頂いた成果です。私としましては「大事なことは十一面観音菩薩がここ大和の中核で造られたことだ」という父の言葉を胸に、宗教者の一人として今後も奈良が人々の心の拠りどころとなるよう精進を続けていく所存です。